

或る日

僕はスケッチをしていた
いつの間にか誰も居なくなった斜面で
寂しさに取り囲まれている
きつと風邪をひいて寝込むことになるだろう
温かいけれど湿った風が
肌から体温を奪い去ってゆく
曖昧模糊とした風景が、画用紙の上に
あたかも揺れる水面に映ったもののよう
あたかも死の直前の夢のように
次第に浮き出されてゆく

(黄泉への入り口)

僕は一体何を描いているのか
何を準備しているのか
いや、むしろ
何を躊躇い、怖れているのか

(寒い)

陽が傾いてゆくを感じる
しかし、画用紙の上では別な世界が
夕暮れへと一斉に飛び立つ蝙蝠のように
一気に拡大して僕を飲み込もうとする

生よりも遥かに魅惑的な
死、という言葉の持つ響きに吸い込まれてゆく

(お母さん)

気だるい空腹と疲れと一緒に
心地よい風が僕を包み
筆を進める力を奪ってゆく

(お母さん)

この記憶は消えてしまうのか
ああ
肩が冷えてゆくにつれて眠くなる

*

少年の心臓は止まっていた
夜の帳の中で

その画用紙には
一軒の家と庭が描かれていた

(2014.3.2)